2020.11.23

養老渓谷 3 部作 第 2 部梅ヶ瀬渓谷・大福山ハイキング記

惠谷　浩

新型コロナウイルス禍、先々月に続いて千葉県房総半島のほぼ中央にある養老渓谷のハイキングに出かけた。先々月は滝巡り・粟又の滝コースだったが、今回は梅ヶ瀬渓谷・大福山コースとした。このコースは 2016 年 12 月 8 日にも数年ぶりに出かけている。また、2004 年 11 月 22 日（月）と 2008 年 12 月 1 日（月）付けの梅ヶ瀬渓谷・大福山コースのネガ写真が見つかった。これら 16 年前、12 年前のネガ焼増写真をデジタルカメラで複写して今回と比べながら、ハイキングの様子を編集した。

2020 年 11 月 17 日（火）7:20 自宅発。スーパーで昼食用パンなどを買い、北習志野駅 7:44 発新京成線、JR 総武線、小湊鉄道で 9:53 養老渓谷駅着。2 両編成の小湊鉄道・ディーゼルカーは乗客がほぼ 3 割で、筆者を含めマスク姿であった。

9:59 養老渓谷駅

養老川に架かった青色の渓谷橋から赤色の宝永橋を望む。2008 年 12 月 1 日に望んだ宝永橋の写真には紅葉・黄葉・緑葉の対比が美しかった。今回 11 月 17 日は少し早過ぎたよう。このことは、このコースで最初に見かける梅ヶ瀬渓谷の縣崖（切り立った崖）での紅葉・黄葉・緑葉の対比が 2008 年 12 月 1 日の写真では非常に素晴らしかったことから思い知らされた。

10:06 ディーゼルカー

10:17 渓谷橋

2008 年 12 月 1 日の渓谷橋

10:20 宝永橋

2004 年 11 月 22 日の宝永橋

2008 年 12 月 1 日の宝永橋

10:21 延命地蔵

10:27 野菊の花

10:29 軒下の干し柿

10:34 黒川沼とカエデ

10:42 最初の懸崖

2008 年 12 月 1 日の最初の懸崖上部の紅葉

10:56 朝生原トンネルを抜けると、そこは梅ヶ瀬渓谷（梅ヶ瀬川）の沢沿いの道であった。沢の幅は 7～15m 程度、現在の水の流れの幅は 3～10m 位である。沢も流れも時々非常に大きくなり、流れの速さは遅いがよどんだり急流となることも時々あり、変化に富んでいる。また、何度も流れの中の飛び石を渡って反対側の道に移り、上流に上って行った。ハイキングにしては厳しく、ちょっとした山登りであった。途中、数ヶ所で大きな横穴を見かけたが、自然が形成したもののようであった。長年の水の流れにより出来たのだろうが、現在の水の流れや予測される増水期の流れよりも随分上部にもあり、不可思議。さらに、ほぼ垂直に切り立った懸崖は奥深い山地でないこの梅ヶ瀬渓谷にどのようにして出来たのだろうか。

11:15 断層が際立つ懸崖

11:41 流れと支流の中の飛石

11:43 沢の中の道に立つ筆者

11:54 沢・流れと懸崖

12:02 飛石と反対側の道

12:05 懸崖の黄葉

12:19 階段状になった沢の岩

12:32 沢の流れの横の大きな横穴

12:37 沢沿いの道の横の大きな穴

12:38 懸崖の紅葉・黄葉

12:47 大福山と日高邸跡への分岐点

途中で写真撮影をしてもらった人に聞いたところ、大福山と日高邸跡への分岐点に崩落のため通行禁止の標識があったが、日高邸跡に行った。そこには４名の人が座っており、今もいるだろうとのことだった。そこで日高邸跡に行くことにした。

分岐点から日高邸跡への道はほとんどが沢の中であった。途中、倒れた大木が道をふさいでいる所が１ヶ所あったが、難なく大木の幹の下をくぐり抜けた。このような道は、登山ではよくあることで通行禁止の標識などない。通行禁止とは大げさなと失笑。約 10 分で日高邸跡に到着した。６名の人が５ヶ所にある椅子に座っている。これまでに何度も訪れているが、昔を偲ぶ静寂の光景に毎回感動。

日高邸跡は日高誠實（ひだかのぶざね）が明治 21 年・52 歳のときから 13 年間に渡り、住居裏に建てた梅ヶ瀬書堂で講師を招き英数・国漢など、自らも国漢・書道・作文などを市原・君津・山武など近隣各地の人々を塾生として指導した所である。日高誠實は天保７年（1836 年）日向国（宮崎県）に生まれ、20 歳のとき高鍋藩命により江戸に遊学し、帰国後 32 歳で明倫堂の教授となり、明治６年・37 歳のとき陸軍大尉となり陸軍省に勤務。明治 19 年・50 歳で陸軍省を辞し官有地 299 町歩を無償で借受け、市原郡大久保村西沢に居を構え、梅 400 本程を植樹、梅ヶ瀬と名付けた。明治 21 年・52 歳、梅ヶ瀬書堂を開校、80 人収容の２階建寄宿舎を設けた。明治 34 年・65 歳、梅ヶ瀬書堂閉鎖。大正４年・80 歳のとき、家族や、門弟で多方面に活躍する人々に看取られ、梅ヶ瀬にて生涯を閉じたという。

日高邸跡に約 20 分滞在し、持参のパンやチーズ・みかんなどで遅い昼食後、大福山方面と日高邸跡方面への分岐点に引き返した。

12:51 沢の中の日高邸跡への道

12:56 沢沿いの道をさえぎる倒木（手前）

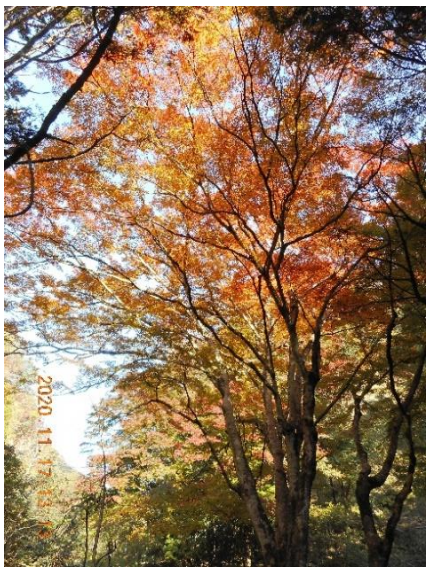
12:58 日高邸跡を目の前にする

13:02 日高邸跡にて

13:10 今も残っている日高邸跡地の建物の土台石

13:11 日高邸跡地

13:12 日高誠實翁梅ヶ瀬書堂地の石碑



13:13 日高邸跡のカエデの大木

大福山方面への分岐点で、張られた黄・黒色の綱に吊るされている「通行止/大福山方面には行けません」の札を改めて見たが、日高邸跡の道があの程度なら、通行止といってもそれほどではないだろう。上れるだろと思い、大福山に登ることにした。

13:36 尾根ルート・林道への標識の道を上って行くと、道に倒木があったが難なく通過。ところがまもなく、登山道の上に土砂崩落があり、次々と土砂・岩の崩落に出会った。なるほど「通行止/大福山方面には行けません」のとおりである。考えが甘かったか。しかし 15 分位の間、崩落した所を慎重に歩き無事進むことが出来た。もみじ谷のつづら折れの道を上る頃には崩落もなくなり、少し急坂の道を紅葉・黄葉を楽しみながら上った。15:00 大福山 285m 山頂に近い林道・舗装道路に達した。この林道の手前にも黄・黒色の綱が張られ「崩落のため通行禁止」の立札が立っていた。この間に一人として出会わなかった。皆さん率直に札に従っているのだろうか。それとも登山は興味ないのだろうか。山頂へはあと少しのようだが、登山道は探しても見つからない。

13:42 倒木

13:51 登山道に土砂崩落

13:56 道に岩石の崩落

14:06 心和ませる青紫色の花
（イワギキョウか）

14:09 つづら折れの紅葉

14:10 もみじ谷のつづら折れからの遠望

14:12 つづら折れの紅葉・黄葉と遠望

14:23 階段状の登山道

14:27 尾根道/右は道の一部が崩落

15:02 張られた綱と通行禁止の立札

林道横に東屋があり、その横には大きな日高誠實顕彰碑が梅ヶ瀬会により平成 11 年（1999 年）に建立されている。房総の山々を一部だが望まれた。小休息の後、舗装された林道を歩いて白鳥神社へ。神社に参拝して、引き返し大福山展望台に上った。展望台からは 360 度、一部樹木に遮られているので、340 度位の房総半島の山々が眺められる。全国 47 都道府県毎に最も高い山の高さを比較すると、千葉県が最も低く、次いで沖縄県である。従って、房総半島には高山はないが、連なる山々はその広さと奥深さが伝わり、感動の一語。やはり登ってきた甲斐があった。また、2004 年 11 月、2008 年 12 月の写真と比べると・・・。

15:04 大福山山頂近くの東屋

15:04 日高誠實顕彰碑

15:05 東屋からの光景

15:17 白鳥神社途中からの房総の山々

15:21 白鳥神社

15:22 白鳥神社本殿

15:23 神社の神木

15:34 大福山展望台

南/天津小湊方面、鴨川・館山方面

展望台からの眺望（1）

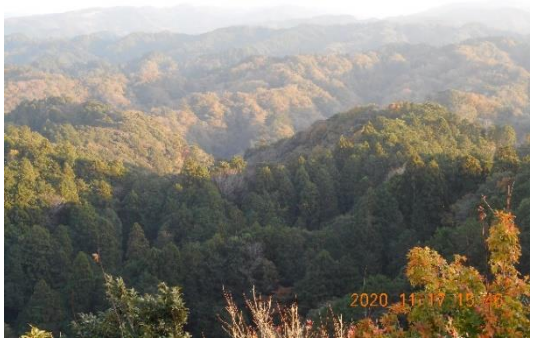
西/富士山方面、富津岬・アクアライン方面

北/市原市役所方面、筑波山・銚子方面

展望台からの眺望（2）

東/太東崎方面、大原・勝浦方面

展望台からの眺望（3）



15:46 展望台から鴨川方面をズーム

2004 年 11 月 22 日の展望台からの鴨川方面と筆者

15:47 展望台から館山方面をズーム

2008 年 12 月 1 日の展望台からの館山方面

15:48 展望台から勝浦方面をズーム

2008 年 12 月 1 日の展望台からの勝浦方面

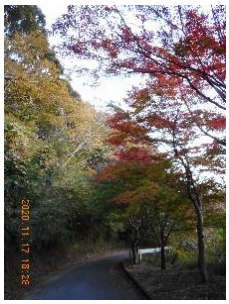
15:50、この時季、日はつるべ落とし。大福山を後にし、林道を歩き養老渓谷駅へ急ぐ。途中、やはり一人として歩く人には出会うことがなく、車２台、バイク２台に出会っただけであった。女ヶ倉橋の近くに人家が数軒あるので、車はそこの人だろう。17:15 養老渓谷駅着。丁度 17:24 の始発ディーゼルカーがある。一両で乗客は数名、途中中学生らしき者が 10 名位乗車し、しばらくして２ヶ所の駅で下車。通学、地元の人の足となっているよう。また、全員マスク姿。観光客は時刻が遅いためだろう見当たらなかった。

15:54 林道を下る

2008 年 12 月 1 日の林道の筆者

16:10 林道の光景/ススキと紅葉

16:19 女ヶ倉橋



16:28 林道と紅葉・黄葉

16:34 セメント山肌の水抜きパイプに育つ紅葉

1 日フリー乗車券 1,800 円

（五井・養老渓谷往復 2,500 円より割安）

今回の約 15km の梅ヶ瀬渓谷・大福山ハイキングは、晴天下の紅葉・黄葉を楽しむことができ、今後の生活の活力を得た。第３波となる新型コロナウイルス感染が全国的に広がる中、この 20 年間位風邪にかかったことはないが、コロナへの対応のために、インフルエンザ予防接種を受けた。さらに肺炎球菌予防接種も初めて受けた。出来るだけの対応をして是非とも新型コロナウイルスに打ち勝ちたいものである。